

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2024年 6月 25日	
所属部局・学年	野生動物研究センター 修士1年
氏名	島田真優

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
愛知県犬山市
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園科学実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2024年 6月 14日 ~ 2024年 6月 16日 (3日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター山本真也先生/日本モンキーセンター、キュレーター、新宅勇太先生、 その他日本モンキーセンターの飼育員の方々
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の実習では、飼育動物の観察、動物園で行われている取り組みの見学・体験を行った。
スケジュール 6/14 日本モンキーセンター着、園内の見学 6/15 グループワークでの観察、骨格標本作成と保存されている標本の見学、骨格標本の分類 6/16 飼育業務の体験、来園者の調査
グループワークでの観察 私たちのグループでは、ジャングルなどの見通しの悪い環境に生息している種は、見通しの良い環境に生息している種よりも音声を発する頻度が高いという仮説で観察を行った。対象種はテナガザル、アビシニアコロブス、アヌビスヒヒ、ワオキツネザルであった。テナガザルとアビシニアコロブスは熱帯雨林に、ワオキツネザルはマダガスカル乾燥林などに、アヌビスヒヒはサバンナに生息している。生息地の見通しは、アヌビスヒヒ、ワオキツネザル、テナガザルとアビシニアコロブスの順に良いと言えるため、この順に音声の頻度が低いと予測された。観察の結果、1分間あたりの音声の平均回数は、アヌビスヒヒが1.2回、ワオキツネザルが0.85回、テナガザルが0.6回とアビシニアコロブスが0回であった。この結果は予測と相反するものであり、仮説は支持されなかった。この原因として、観察していた人間、与えられた餌や社会交渉が発声のトリガーとなっていた可能性が高いことが考えられる。さらに、テナガザルとアビシニアコロブスの飼育環境は本来の生息地とは大きく異なり、見通しの良い環境であったことも原因と考えられる。
私はフクロテナガザルを観察したが、興味深い発声を聞くことができた。フクロテナガザルは一夫一妻のペアでナワバリを持ち、主に朝にペアでデュエットを行う。メスがグレートコールと呼ばれる連続性のある長い音声を発し、オスがそれに合いの手を入れる形で短く発声することが知られている。今回の観察ではこのデュエットを聞くことができた。発声時は喉袋を風船のように膨らませ(写真1)、大きく響かせていた。朝10時ごろに10分ほどデュエットを行った後、1時間ほど餌を食べて休憩していたが、この間は一度も発声しなかった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真 1. 喉袋を膨らませて発声するフクロテナガザル

解剖・標本の見学

動物園で飼育されていた個体が亡くなると、死因究明のために剖検を行った後、内臓はホルマリン液内に保存され、骨や毛皮などの組織は標本として保存される。今回は、扱った個体の毛皮の状態があまり良くなかったため、皮膚や筋肉などの軟組織を除去し、骨のみを標本にする作業を見学した(写真 2)。ある程度筋肉を除去した後、両手足の骨をそれぞれ混ざらないように小さなふくろに入れたうえで、大きなネットに全身の骨を入れて水につけた。水につけることで筋肉がバクテリアに分解されるため、骨のみを取り出せる。標本は、適切に保存すれば、何十年後、何百年後に研究に利用される可能性があるというお話を聞き、標本作成はとても重要な仕事であることを知った。



写真 2. 軟組織を除去する作業の見学

骨格標本の分類

軟組織を完全に取り除いた 1 個体の全身の骨格標本を部位別に分類した。比較的大きな頭蓋骨、下顎骨、肩甲骨、寛骨、鎖骨、四肢の骨には個体の番号を記し、部位別に袋に入れて保存した。種、性別、年齢によって骨の特徴が大きく異なっていたり、骨折痕がある骨や癒着した骨などがみられたり、大変興味深かった。

飼育業務の体験

私は南米館で体験を行った。ウーリーモンキーをモンキーセンター外に移動する予定があったため、ケージを移動させるお手伝いをさせて頂いた。飼育動物を移動させる際は、事前に動物の前に移動用のケージを呈示して慣れさせ、移動用のケージに移すという作業をするらしい。その後、オマキザルのケージに遊び用の消防ホースを設置した(写真 3)。消防ホースはとても頑丈で簡単には切れないため、その上で動物が怪我をすることなく遊んだり、休憩したりできる。ハビチュエーションを行うことで個体の移動時の負担をなるべく減らしてあげたり、ケージの中での行動の選択肢を増やしてあげたりという動物福祉の観点が取り入れられていることを知った。



写真 3. オマキザルのケージに設置したブランコ

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

来園者の調査

来園者の調査では、実習生がそれぞれ 1 エリアを決め、来園者 6 グループの滞在時間を計測し、会話を聞いて動物のどのような観点到に注目しているかを記録した。私はアヌビスヒヒのエリアを選択した。一部の来園者の方は長い間観察したり、説明書をじっくり読んだりしていたが、多くの来園者の滞在時間は 1 分未満で、動物の生態や行動などに着目している方は少なかった。飼育員の方々は、教育活動として、来園者に動物の生態などについて知ってもらえるように展示方法や説明書きを工夫しているので、その思いがもっと多くの人に届くと良いなと思った。

感想

動物園で行われている飼育の工夫や標本作成の意義、来園者の利用の仕方などを飼育員側と来園者側の両方の視点から知ることができ、動物園の在り方について深く考える良い機会となった。

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

6. その他（特記事項など）

本実習は PWS によりご支援いただきました。ご支援に感謝申し上げます。
実習の引率とご指導をしてくださった山本先生と新宅先生、実習をサポートしてくださった日本モンキーセンターの皆様に深く感謝申し上げます。